

Title	「インターネット時代の情報資源活用」の開発とその意義(電気通信普及財団援助による特別講義)
Author(s)	若松, 昭子
Citation	聖学院大学図書館情報学研究, 第6号 寄附講座「インターネット時代の情報資源活用」特集号, 2011.3 : 1-6
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3356
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

電気通信普及財団援助による特別講義

「インターネット時代の情報資源活用」の開設と意義

若松 昭子

1. はじめに

聖学院大学図書館情報学課程では、財団法人電気通信普及財団（以下「電気通信普及財団」と呼ぶ）による特別講義開設助成金を受けて、平成21（2009）年度および平成22（2010）年度と2回にわたり「インターネット時代の情報資源活用」と題する講義を開講した。企業や財団などの大学外団体から資金援助を受けて開講されるこうした形式の講義・講座は、一般に「寄付講座」と呼ばれる（以下、本特別講義を本講座と呼ぶ）。電気通信普及財団のこの寄付講座は、原則として3ヵ年継続して援助を受けることができる。本学では、平成23（2011）年度も本講座開設を念頭に計画を策定中である。

本講座援助の最終年度となる2011年度には、過去2ヵ年の実施経験とそれによって得られた知見を駆使して、講義内容のいっそうの充実を図りたいと考えている。本講座は、聖学院大学カリキュラムの秋学期（10月～3月）のなかで、毎週1回90分間の授業を15回積み重ねることによって構成される。また、毎回異なる講師が授業を引き継いでいくという、いわゆるオムニバスの形式が採用されている。毎回の授業では、図書館情報学や情報学の分野における第一線の研究者が、それぞれの得意とするテーマのもとで授業を行った。結果として、視野の広い多彩な内容の授業を提供することができた。

しかし、他分野において活躍する講師達が一堂に会する機会を得て十分な話し合いを行うことは容易でなく、担当以外の他の授業でどのような内容が講じられているのかが見えにくいという難点もあった。そこで、いまだ本講座の実施半ばではあるが、これまでの内容を振り返り2011年度の講座によりよく反映

するために、2010年度に行った各講義内容をまとめ、ここに発表することとした。

ところで、本講座は聖学院大学の司書課程の選択必修科目（省令科目「図書館特論」の読み替え科目）として、また政治経済学部コミュニティ政策学科の専門科目として開講された。さらに、講座内容に興味関心を持つ多くの社会人も受講が可能なようにと、一般人を対象とした公開講座としても位置づけられた。2009年度の受講生は77名（うち社会人は15名）、2010年度の受講生は73名（うち社会人は7名）であった¹⁾。他方、時間的な制約や諸事情により受講したくともできなかった学生・社会人の方々も少なくなかったのではないかと推測する。

本講座記録は、授業者が講義内容を充実させるためばかりではなく、受講が叶わなかった多くの学生諸君や社会人の方々に、興味深い講義内容の一端を伝えるための一助ともなってくれるのではないかと期待する。

2. 講義開設の背景

聖学院大学図書館情報学課程では、これまでも学外の人々を対象としたいくつかの事業を実施してきた。例えば、文部科学大臣委嘱による司書講習や学校図書館司書教諭講習である。前者は、「社会教育法」の下法である「図書館法」にもとづき、主として司書資格を持たない現職の図書館職員を対象に実施される講習であり、後者は、「学校教育法」の下法である「学校図書館法」にもとづき、司書教諭資格の取得を希望する小学校・中学校・高等学校の現職教諭を主たる対象に実施される講習である。2010年度の時点で、司書講習は10回目、学校図書館司書教諭講習は12回目を数えた。

2007年度及び2008年度の2カ年にわたっては、独立行政法人日本学術振興会（以下、日本学術振興会と呼ぶ）との共催で「ひらめき☆ときめきサイエンス～KAKENHI～」を実施した。これは、日本学術振興会の助成を得て実施される、科学研究費補助金（科研費）による研究成果の社会還元・普及事業であり、2005年度以降毎年継続して行われている²⁾。この事業は、大学等の研究機関が行っ

ている最先端の研究成果を子どもたちにわかりやすく伝えるのが目的であり、対象は小学校高学年から高校生までとなっている。本学では、「本を解剖するーメディアとしての書物の世界」（2007年度）、「本を解剖するvol.2ー情報が生まれる場所・情報を生かす場所ー」（2008年度）と題する2つのプログラムを実施した³⁾。全国で実施されたプログラムの中で、図書館情報学分野のものは他に類がないこともあり、書物や情報に興味を抱く受講者たちが集まった。

しかし、これらはいくまでも学外の人々を対象とする社会貢献のプログラムであり、最も身近な学生たちには直接関わりがないということがやや残念に思われた。本学学生を対象とした図書館情報学課程らしい企画、例えば、多角的に情報を考察することができるようなプログラムを立ち上げるといったことはできないだろうか。そのように考え始めた頃、インターネット上で電気通信普及財団の特別講義開設援助の事業計画があることを知った。これは、電気通信分野の学問の普及・振興を図る目的で、昭和59（1984）年の当該財団設立以来実施されてきた援助・助成事業の一環であり、社会科学系及び自然科学系を問わず、電気通信関係の講座開設を企図する国内の大学に開設資金を援助しようというものである⁴⁾。早速、図書館情報学課程の河島茂生特任講師と共に、応募に向けて計画を立案した。

3. 講座開設の意義

講座全体のテーマを決定するにあたり着目したのは、急速に進展する「社会の高度情報化」と「情報のデジタル化」という現状である。インターネットが生活の様々な局面に浸透してきている今日、ネット上にある情報資源を活用する力は人々にとってますます重要になっている。本講座では、情報資源活用の技術的側面だけではなく、情報の意味やメディアの歴史といった人文的側面や、インターネットの発展に伴う様々な変化や可能性についても言及したいと考えた。

広範な内容を扱う場合、ともすれば漠然とした入門内容に終わってしまう危

険性がある。しかし、本講座はできる限り専門性の伴う内容にしたいと考え、毎回異なる研究者に各自の最新の研究成果を盛り込んだ講義を依頼した。講師陣には、新進気鋭の若手研究者からベテランの大学教員、さらに情報基盤整備に携わるわが国の中核的機関「独立行政法人科学技術振興機構」の専門家や、情報弱者を含むすべての人々が享受できる情報社会構築をめざす民間団体「NPO法人ハーモニーアイ」の実践活動家など多彩な人材を招いた。そのため受講生からは、通常では接することができない学外研究者と出会い学術的刺激を受けたという声や、各分野の最先端の研究成果に触れることができたといった好意的な感想が多く寄せられた。他方、個別テーマと全体との関連性が掴みづらい、内容が高度すぎて難解であるといった受講感想も聞かれた。

しかし、毎授業時に課せられる小レポートの提出結果を見ると、学生たちの関心度や理解度は筆者が当初予想していたよりも全般的に高く感じられた。また、本講座終盤において、受講生に最も印象に残った回と講義名（「ガイダンス」と「まとめ」の回を除き第2回目から第12回目を対象）を尋ねたところ、その結果は多岐にわたり、特定の回に集中することはなかった。広範なテーマと個性豊かな講師陣による多彩な講義が、受講生の多様な興味関心をひき出すことに繋がったものと考えられる。本講座をこのようなオムニバス形式に構成した成果は十分あったのではないかと自負している。

また、本講座を企画した側にとっても、多くの講師たちとの協同講義は得るところが大きかった。日頃出会う機会の少ない隣接分野の研究者や実践活動家の方々との一つのテーマを分かち合い、身近に話を聞くことができたことも新鮮な喜びであった。本寄付講座は、講座の立ち上げ等に対し助走期間的に費用が援助されるものであり、将来的に常設講座として定着されることが期待されている。しかし、通常のカリキュラムのなかに今回と全く同じ形式で本講座を設置することは資金的に見てもなかなか難しい。しかし、本講座の開設を通して得られた経験や知見を関連性のあるいくつかの既設講義に応用することで、今後の授業展開に深みを加えることが可能である。それは、本学の図書館情報学

課程だけではなく、本講座に参加してくれた講師一人ひとりのそれぞれの本務場所においても同じであろう。本講座が例え常設的な講座として残ることにならなくても、本講座開設を通して得られた成果は、各講師が戻っていったそれぞれの場所において様々な形で活かされていくものと確信する。

4. 記録にあたって

本講座は、大学外から招聘した10名の講師に加え、本学図書館情報学課程の河島講師および筆者の13名で担当した。学外の講師の方々はそれぞれ1回の講義を、河島講師は初回のガイダンスと10回目の講義を担当した。残りの回については筆者が担当し、各講義中で示唆された課題等に関する意見交換や討議を通して各自の理解を深めると共に講座全体の総括とした。

今回の記録は、討議の部分を除いた2010年度の各回の授業について、講師自身がそれぞれの担当箇所をまとめるという形をとった⁵⁾。執筆時間や紙面の都合等もあり、授業記録はすべて同じ形式で統一することが難しかった。そこで、以下の2つの形式のうちいずれかの方法でまとめてもらうことにした。①授業内容をもとに適宜加筆修正を加えた論文形式。②授業概要と授業時の配布資料・スライド資料。

各稿は、講師の特徴や授業方法などを反映してか、授業回によって分量には大きな差がある。語や概念、あるいは表記等にも多少の違いが見られる場合がある。また、各回にはそれぞれ個別テーマが設定されていたが、サブタイトルのもとにテーマがより絞り込まれている場合もある。しかし、それらを統一することはあえてしなかった。一人ひとりの講師の個性あるいは研究の視点や方向性などを感じてもらうことも、オムニバス形式の講義ゆえの楽しく貴重な体験であろうと思う所以からである。記述形式の不統一ななかにも、それぞれの授業雰囲気を感じ取ってもらえればありがたい。

(本講座の開設にあたり、電気通信普及財団には多大な援助をいただきました)

特集：寄付講座「インターネット時代の情報資源活用」

た。また、学外講師の方々にはご多忙にもかかわらず快く担当をお引き受けいただきそれぞれ魅力的で内容の濃い授業を展開していただきました。深く感謝申し上げます。)

注

- 1) 人数は履修登録時のものである。毎回の授業で課題が出されるため通常より厳しい授業となったようで、単位取得に至らなかった受講生も少なからずあった。そのため、最終的な単位取得者数はこれよりも1~2割程度少ない。
- 2) 詳細は日本学術振興会のURLを参照。<http://www.jsps.go.jp/hirameki/> (2011.3.31)
- 3) 本学プログラムの詳細は以下を参照。

<http://www.seigakuin.jp/course/library/hirameki/2007/index.html> (2011.3.31)

<http://www.seigakuin.jp/course/library/hirameki/index.html> (2011.3.31)

また、以下は実践記録である。

「特集：ひらめき☆ときめきサイエンス『本を解剖する』『図書館情報学研究』第5号, p.1-92, 2009.

この本文は聖学院大学機関リポジトリ「SERVE」上でも閲覧できる。

<http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/> (2011.3.31)

- 4) 平成22(2010)年度末時点で、本学を含む93の大学に援助が行われている。
<http://www.taf.or.jp/index.html> (2011.3.31)
- 5) 第4回目にあたる「情報メディアの歴史」の授業は、当初、安形麻理講師が担当予定であったが、都合により2010年度は樫村雅章講師に代講いただいた。